

令和7年度
「おくのほそ道」最上町俳句大会
入選作品



選者近詠

忘るること思い出すこと寒満月

好きな句を選ぶ楽しさ初雀

ひと筆の金蛇様と冬座敷

大類つとむ

初日待つすでに明るき波頭

柏手を羽ばたくやうに初御空

ここよりの旅路は家路冬林檎

松田佳津江

大類つとむ 先生選

◇一般・高校生の部

赤倉ゆけむり館賞

紅葉且つ散る露天湯にみてひとり

東京都

早坂洋子

特選

ふるさとの柿ふるさを遠く吊る

北海道

藤林 正則

優秀

秋風にからりと乾く藍の布

新潟県

泉 諒

春耕の鋤の深さの定まらず

神奈川県

下村 修

佳作

草笛が発車の合図縄電車

大分県

小野道山

秋の田の一枚ごとに暮れゆけり

神奈川県

石垣 葉星

万博も野良の仕事も夏帽子

奈良県

中村 宗一

入選

友逝けど言葉生きをり涼しい月

群馬県

佐藤 礼子

手放すと決めし生家やタかなかな

神奈川県

坂口 和代

スルメの香乗せてストーブ列車着く

神奈川県

文彦

曲屋の奥に風栖む夏座敷

群馬県

木下 涼薫

大類つとむ 先生選

◇中学生の部（優秀句）

宿題とにらみあうまま夏が去る

世田谷学園中学校一年生
加藤 千里

息ひそめてんとう虫の星数える

水都国際中学校三年生
廣田 咲羽

銀杏散る錆びたブランコこぎながら

東海学園東海中学校三年生
石山 弘晃

◇小学生6・5・4年生の部（優秀句）

昼ね中おきるとひぎにねこがいる

向町小学校四年生
谷藤 すみれ

夏休み遊ぶ約束わすれがち

田原中部小学校六年生
小川 桜海

ゆきもよいふくれてきたるピザの耳

田原中部小学校六年生
篠生 裕聖

◇小学生3・2・1年生の部（優秀句）

あかとんぼうちのはたけは大にんき

向町小学校一年生
坂井 悠人

ろてんぶろおちばをあたまにのせてみる

向町小学校一年生
かとう あおば

しちごさんまっかなかえでとしゃしんとる

向町小学校一年生
高橋 莉緒菜

松田佳津江 先生選

◇一般・高校生の部

赤倉ゆけむり館賞

鬼灯や頑固な義父は風呂が好き

愛知県

えっちゃんあら

特選

春の空子の自転車の手を離す

鹿児島県

宙

優秀

嫁取りに提げて二升の新走り

大分県

小野道山

石庭の箒目にある秋思かな

東京都

岩田 雪枝

佳作

湧き水に寝返りを打つ西瓜かな

愛知県

志村 紀昭

またひとつ浮ばぬ漢字昼の虫

山形県

志波

船頭の仕送り話秋の雲

山形県

高橋 タキ子

入選

飛び入りの姉さ被りの踊りかな

福岡県

今林 快波

青空へ子も狩りだされ大根干し

滋賀県

野口 成人

夜の雨秋の扉を叩きをり

奈良県

堀隼人

古文書に集むる額文化の日

千葉県

山本ふぢな

穂薄のぐうちよきはあに見送られ

山形県

中宮 章子

松田佳津江 先生選

◇中学生の部（優秀句）

照明がうたっておどるクリスマス

三浦市立南下浦中学校
岡田 悠陽

手の平にどこからきたのしもやけくん

市川市立第六中学校三年生
野口 唯翔

秋の空ういてるようだ心臓が

市川市立第六中学校三年生
森 葵彩

◇小学生6・5・4年生の部（優秀句）

風鈴の音色も勝てぬこの暑さ

大堀小学校五年生
阿部 しずく

ヤギさんよ夏の宿題食べてくれ

大堀小学校五年生
向當 将希

雪だるまメガネかけたらお父さん

田原中部小学校六年生
木村 心優

◇小学生3・2・1年生の部（優秀句）

ハウセンカはなびみたいにはじけとぶ

大堀小学校三年生
石山 はな

あかとんぼうちのはたけは大にんき

向町小学校一年生
坂井 悠人

くまさんへゆきがふるからねむりましよう

向町小学校二年生
なかじま とうり

「俳」を楽しく

大類つとむ

長くつづくこの大会、今年度は飛び切り沢山の句が集まりました。とても嬉しいかぎりです。大会運営に携わる方々をはじめ多くの方々の尽力あればこそでしょう。

ある意味で俳句はとても取り組み易く、ペン一本と一枚の紙片さえ有れば、自分の作品とその思いを長くとどめておく事ができます。勿論上出来不出来は二の次です。

しかしいざ実作となるとその現場では容易に俳句にまとめる事はそれこそ難しいことのようにです。俳句を好む方とそうでない方が居られるのは当然ですが、「おくのほそ道」途次であるこの地はとても好条件の環境とも言えます。俳画や俳諧、俳句などに使われる「俳」の一字は「おどけ」や「戯れ」「遊び」などの意味を含んでいます。旅中に見つけたものや日常の中でふと感じた事を、楽しく素直に十七音でシャッターを切ることがより充実した時空になるのではないのでしょうか。

小中学生の部では、

「息ひそめてんとう虫の星数える」

が特に目に止まりました。報告的であつたり季節の説明になつてしまつたり、あるいは通俗的な言葉を並べたような作が多い中、「私」

の事実がいきいきと生きています。「息ひそめ」の一語が天道虫の小さな世界と相まって直ぐ作者が見ている映像へ誘ってくれます。リアルな瞬間です。

「ふるさとの柿ふるさとを遠く吊る」

ちよつぱり切なくなる句です。ふるさとからとどいたふるさと産の柿を、いま遠くはなれたこの空へ吊る……。郷愁の一語では尽くせない現実をロマンを持って俳句にしてくれました。さまざまの果実がありますが「柿」ならではの句と言えるでしょう。

「紅葉且つ散る露天湯にゐてひとり」

「ひとりゐて」ではなく「ゐてひとり」です。これによって「ひとり」にかかる重さが全く違ってきます。おそらくご年配の方の句かと思いますが、紅葉によって引き出される時間と空間が自身の過ごした年月と重なって更に思いを深くしているのでしょう。

「秋風にからりと乾く藍の布」

俳句の魅力がすべて入っているような申し分のない句です。着眼、感触、色彩ととても心地よい気分になさせてくれます。

「春耕の鍬の深さの定まらず」

耕すは「田返す」から生まれた言葉です。種を蒔く前や苗を植える為の大事な作業です。冷たい冬を経た土はなかなか鍬をスムーズに受けてくれないでしょう。しかしそこから既に春の喜びと収穫への期待が胸中に生まれています。

講評

「選を終えて」

松田 佳津江

俳句は、心のコップから溢れた一滴の感動を、十七文字の器で表現する日本独自の美しい詩形です。忙しい日常を丁寧に愛おしく眺めるためのレンズなのかもしれません。

「おくのほそ道」俳句大会へ、熱意あふれる作品が多く寄せられ、選考をしながら多くの刺激を頂きました。

全体の傾向として、酷暑だった夏の暑さを詠んだ句が多く見られ、時代の空気感や季節の移ろいが見事に表現されていました。

入賞された作品は、写生の確かさに加え、作者独自の言葉の選択や、調べがあり、情景が鮮やかに浮かび上がってくる。そんな、想像力を強く掻き立てられる作品を選びました。

「秋の空浮いてるようだ心臓が」

中学生の部の俳作品ですが、今回の応募作品の中で、最も詩を感じさせる作品でした。秋の空の高さや、透明感を単にきれいと表現するのではなく、自分の「心臓」が浮き上がっていくような身体的な感覚で捉えているのが非常に独創的です。

「ヤギさんよ夏の宿題食べてくれ」

童謡「やぎさんゆうびん」をモチーフに、終わらない宿題を白やぎさんに託してしまいたいという、切実な願いが伝わってきます。

「くまさんへゆきがふるからねむりましょう」

冬眠しないで、いつまでも街に出てくる熊に、「ゆきがふるから」と熊を氣遣う作者の優しい氣持が伝わってきます。静かな山奥で、春までゆっくりと眠ってくれると良いですね。

「鬼灯や頑固な義父は風呂が好き」

義父との独特な距離感や敬意が伝わってくる温かみのあるユーモラスな作品。鬼灯の鮮やかな朱色は、義父の一筋縄ではいかない「頑固さ」や、内面に秘めた血の気の多さを象徴してるように感じられます。「風呂好き」という具体的な習慣から義父のふとした日常の緩みや人間味が伝わってきます。

「春の空子の自転車の手を離す」

明るい春光の中で、子供が未来へ向かって漕ぎ出す瞬間を、親の温かい眼差しで切り取った作品。喜びと一抹の寂しさが交差するような切なさも感じられます。視点が子供の背中から、一気に高い空へと広がるような構成が、余韻をさらに深めています。

惜しくも選に漏れた作品の中にも、光る言葉がたくさんありました。俳句は日々の発見の積み重ねです。これからも一句一遊の精神で、楽しみながら創作を続けて頂ければ幸いです。